

2018年7月15日聖学院教会聖日礼拝説教

「神の鍛錬」

ヘブライ人への手紙 12：4-13

菊地 順

突然ですが、皆さんはどのような<世界観>をもって生きておられるでしょうか。あるいは、どのような<人生観>をもって生きておられるでしょうか。世界観と言うと、少し高尚な抽象的な感じがするかもしれませんが、これは、元々は、ドイツ語の **Weltanschauung** という言葉から翻訳された言葉です。それは、世界 (**Welt**) についての見方 (**Anschauung**) といった意味の言葉です。こうした世界についての見方、世界観には、いろいろなものがあります。たとえば、世界は物質的なものから成り立っていると考える<唯物論>といった世界観があります。それに対し、世界は精神的なものから成り立っていると考える<観念論>といった世界観があります。あるいは、世界の行く末は既に決まっているという<決定論>あるいは<宿命論>があり、また逆に、何も決まっていないと考える<未決定論>があります。あるいは世界を否定的に見る<悲観主義>あるいは<厭世主義>の考え方があり、また逆に、世界を肯定的に見る<楽観主義>の考え方があります。そうしたさまざまな世界観の中でも、おそらく最も重要なものは、この世界には神が存在するか否かという世界観だと思います。この世に神が存在すると考えるのが<有神論>です。その反対に、神は存在しないと考えるのが<無神論>です。皆さんは、どちらの考え方をお持ちでしょうか。もちろん、教会は、この世界には神がおられるという有神論の立場です。この有神論の立場に立つか、あるいは無神論の立場に立つか、その違いは大きいと思います。それによって、人の生き方は決定的に分かれて行くのではないのでしょうか。そしてまた、先ほど触れた、唯物論か観念論か、あるいは悲観主義か楽観主義かといった見方も、自ずから決定されていくのではないかと思います。おそらく、有神論に立つ人たちは、一般に楽観的な人が多いのではないのでしょうか。それに対し、無神論に立つ人たちは、悲観的な人が多いように思います。

皆さんは、ヘレン・ケラーという人をご存じだと思います。ヘレン・ケラーは1歳半の時に高熱の病に罹り、視力と聴力を失いました。そのため、言葉を知らず、話すこともできないまま成長しました。しかし、サリバン先生という家庭教師の指導の下で、言葉を発見し、精神の世界を知るようになります。そして、その精神の世界を通して、この物質的世界全体を知るようになります。

そのようにしてヘレン・ケラーは、見えず、聞こえず、話せずという三重の苦しみを克服し、現在のハーバード大学の女子部に当たるラドクリフ・カレッジに入学し、卒業後は、障害者の福祉のために、アメリカのみならず、世界を股にかけて活躍しました。このヘレン・ケラーは、日本でも、三重苦を克服した奇跡の女性としてよく知られていますが、しかし、このヘレン・ケラーが非常に熱心なキリスト教徒であり、また非常に楽観的な人であったということは、あまり知られていないように思います。

ヘレン・ケラーは、自叙伝を初め、何冊かの本を残していますが、その中に、『私の宗教』という本と『楽観主義』という本があります。目が見えず、耳が聞こえず、そのため話すこともできなかつた人が、『楽観主義』という本を書いていること自体、驚きではないでしょうか。おそらく、三重の苦しみを克服するためには、それこそ血もにじむような努力が必要であったと思います。特に目が見えず、耳が聞こえない人が、言葉を発することを習得することは、並大抵の努力なしにはできなかつたことだと思います。しかし、そうした苦労を重ねた人が、『楽観主義』という本を書いているのです。そして、自分の人生は、まさに楽観主義そのものであったと語っているのです。なぜ、そうあり得たのでしょうか。その理由は、ヘレン・ケラーの信仰にありました。ヘレン・ケラーは、深く神を信じた人でもあったのです。そして、その信仰から、楽観主義に立つ生き方が生まれてきたのです。

楽観主義、**optimism** と言う言葉は、楽天主義とも訳せます。楽天主義とは、天を楽しむということです。ヘレン・ケラーは、神を信じ、神に信頼し、そして正に神を楽しむことができた人でもあったのです。なぜなら、自分に働きかけてくる神の力を絶えず感じる中で、それを文字通り楽しむことができたからなのです。もし、神を信じるができなかつたなら、ヘレン・ケラーの人生は全く違ったものになっていたいと思います。おそらく、三重苦を克服することも、世界的に活躍することもなかつたのではないかと思います。しかし、ヘレン・ケラーは、神を信じる中で、楽観主義の世界観を与えられたのです。そして、その苦しみを克服し、世界的な活躍をするまでになったのです。

このヘレン・ケラーのことを思いますと、神を信じるか否かと言うことは、非常に大きな人生の要因ではないかと思います。そして、今日の聖書の箇所は、そのことをもっと具体的に、そして大胆に語っているところなのです。今日の聖書箇所の 12 章 5 節には、こういう言葉が引用されています。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」

この言葉は、旧約聖書の箴言第 3 章の 11 節から 12 節に記されている言葉で

すが、何と、主なる神は、その愛する子を懲らしめる、また鞭打たれると言うのです。この言葉は、ちょっと驚きではないでしょうか。今日は、聖学院大学の学生の人たちが多数出席していますが、おそらく、皆さんは、ご両親から大切に育てられてきたのではないかと思います。皆さんの中には、両親から一度も叩かれた経験がないという人もいるのではないのでしょうか。そうした皆さんから見れば、今日の聖書の言葉は驚きではないでしょうか。神は、その愛する子を懲らしめられると言うのです。鞭打たれると言うのです。なぜなら、神は、その愛する子を鍛錬されるからだと言うのです。この鍛錬という言葉は、以前の口語訳聖書では「訓練」と訳されていた言葉です。神は、愛する子を訓練されると言うのです。そして、そのためには、時には愛する子を懲らしめ、また鞭打たれると言うのです。

しかし、このことは、わたしたちの生活を振り返って少し考えて見れば、それほど驚くべき話ではないかもしれません。親というのは、しばしば口うるさく子どもに注意したり、説教したりします。それに対し、子どもはしばしば反発し、時には悪態を突いたりします。しかし、なぜ親は口うるさく注意したり、説教したりするのでしょうか。それは、もちろん、子どもを愛しているからです。子どもを愛しているからこそ、しっかりした大人になって欲しい、幸福な人生を送って欲しいと思い、時には口うるさく説教したりするわけです。しかし、自分の子どもには口うるさい親でも、他の子どもには必ずしもそうではありません。それは、自分の愛する子どもではないからです。しかし、自分の子どもには、しばしば厳しい態度で臨むのです。それは、何よりも、子どもを愛しているからなのです。

今日の聖書の箇所では、それと同じように、神も、わたしたちをしばしば懲らしめ、また鞭打たれると言うのです。それは、わたしたちを愛しているからなのです。ですから、7節の後半では、「神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるのでしょうか」と語られています。聖書は、神を父なる神と告白していますが、その父なる神は、父であるゆえに、またわたしたちがその子であるゆえに、わたしたちを鍛えられると言うのです。しばしば懲らしめ、鞭打たれると言うのです。さらに8節では、こう語られています。「もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません」。「庶子」というのは、今の民法では用いなくなった言葉ですが、いわゆる正妻の子どもではない私生児のことを意味します。ですから、実の子ではないということです。聖書は、何の鍛錬も受けていない人は、神の実の子ではないと言うのです。もっと言えば、神に愛されている子ではないと言うのです。懲らしめもなく、鞭打たれることもなければ、そうした人生は幸いな人生であると思うのが普通だと思います。し

かし、そうした鍛錬が与えられていない人は、神の実の子ではない、神に愛された子ではないと言うのです。

それでは、なぜ神は、その愛する子を鍛錬されるのでしょうか。懲らしめられ、鞭打たれるのでしょうか。人間の親は、だれでも、自分の子どもが立派な大人になるように、あるいは幸福な人生を送れるように、そうした願いをもって躑をしたり、いろいろ新しいことにチャレンジさせたり、あるいは人生経験を豊かにさせようと努力するのではないのでしょうか。10節には、「肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれました」とありますように、肉の父、すなわち人間の父親、あるいは親は、自分の考えにしたがって、自分の子どもに良いと思うことを訓練するのです。それは、皆さん自身が、今まで経験してきたことではないのでしょうか。それに対し、父なる神の目的は、少し異なっています。同じ10節の後半では、こう語られています。「霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです」。神がわたしたちを鍛える目的は、わたしたちを神の神聖にあずからせるためであると言うのです。それは、神との交わりであると言ってもいいと思います。神は、わたしたちを鍛錬することによって、神との交わりへと導き入れられると言うのです。それは、それこそ神を父と呼び、神から子よと呼ばれる親しい関係に招き入れられるということです。それは、父なる神と一つとなる出来事であると言ってもいいと思います。そして、聖書は、それこそが人間にとって最もふさわしいあり方、また最も幸福な在り方であると語るのです。

それは、ちょうど一家団欒の時に似ているのではないのでしょうか。家族全員が一つ所に集まり、心を和ませ、思いを一つにして団欒の時を持つとき、そこには深い平安があります。そして、静かな喜びと感謝の思いが一人ひとりの心に満ちて行きます。それは、神との交わりにおいても同じなのです。父なる神と一つとされる時、そこには深い平安と喜びが満ちています。そして、それと共に、新しく生きる力も希望も与えられていきます。そして、そこには、神を信頼して生きるという、楽観的な生き方も生まれて行くのです。そのとき、もはや悲観する必要はなくなるのです。というより、悲観的になることはできないのです。なぜなら、神がおられるからです。わたしたち一人ひとりを愛して止まない父なる神がおられるゆえに、もはや悲観的になることはできないのです。それどころか、神を楽しむような、楽天的な生き方へと招き入れられて行くのです。そうした人生が、そこから始まるのです。

先に触れたヘレン・ケラーは、そういう人生を見出した人であったと言えます。苦しみを通して、神の存在を知った人であったのです。そして、神と親しく交わり、神を信じ、神に信頼して楽観的に生きた人であったのです。そして、そこから、絶えず人生を生き抜く力を与えられていったのです。そして今、そ

うした人生に、わたしたち一人ひとりも招かれているのです。

ただ、ここで注意しなければならないことは、聖書は、この世界に存在するすべての苦しみを、すべて一律に、神の鍛錬であると言っているのではないということです。たとえば、先々週から先週にかけて、西日本では豪雨による大惨事が生じました。死者が 200 名を超え、行方不明者が未だ多数おられます。この大惨事を前にして、それを神の鍛錬だなどとはだれ一人言えないと思います。敢えて、もし言えるとしても、それはこの悲惨な経験を完全に乗り越えた暁のことだと思います。しかも、その時ですらも、すべての人がそう言えるわけではないと思います。それは、その出来事を、神の鍛錬として経験できた人のみが言えることなのです。それと同じように、わたしたち一人ひとりが経験する日常の苦悩についても、同じではないかと思います。人生の苦しみに遭遇して、それをすぐさま神の鍛錬として受け入れることのできる人は、ほとんどいないと思います。それは、何よりも、苦しみのことです。苦しみ以外の何ものでもないのです。しかし、そうした苦しみの中で、不思議なことに、神との出会いを経験するということがあるのです。そして、その出会いを経験したとき、その苦しみを、新たに神との関係の中で捉え直すようになるのです。そして、そうした苦しみを神の鍛錬であったと告白することができるようになるのです。ですから、そう告白できるということは、それ自体、神から与えられた恵みでもあるのです。それは、決して、自分の力で告白できることではないのです。ですから、そうした経験に至った時に、初めてわたしたちは、それを神の鍛錬として受け止めることができるのです。そうした神との出会いなしには、人生の苦悩やこの世の悲惨な出来事を、神の鍛錬と呼ぶことはできないのです。

しかし、聖書は、確かにそうした神との出会いが、この世の苦しみを通して、この世界にはあると語るのです。一見、人間の目には悲惨としてしか映らない現実に、神の鍛錬と告白せざるを得ない現実があることを告げているのです。それは、一人ひとりに異なる仕方、異なる時に、神の特別の導きの下で起こってくる出来事なのです。ある人にとっては、大きな失恋がそうかもしれません。あるいは大学受験の失敗がそうかもしれません。あるいは、大病に罹ったことがそうかもしれません。またある人にとっては、愛する人を失ったことが、そうなのかもしれません。それは、人それぞれによって異なるのです。しかし、神は、しばしばこの世の苦しみを通して、わたしたちを神の許へと導かれるのです。それは、わたしたちを愛してくださるからなのです。わたしたちが真実の希望と平安と感謝をもって、力強くこの世界を生きるために、神はわたしたちをご自身の許に招かれるのです。

逆に、もうそうした神の鍛錬がないとすれば、人生はもっと悲惨なものになっていくのではないのでしょうか。それは、親に甘やかされて我儘に育った子ど

もに似ているのではないかと思います。そういう人は、社会の常識もルールも知らず、身勝手に生きる大人になり、かえって社会からはじき出されてしまうのではないのでしょうか。それは、惨めな人生でしかないと思います。親は、そういうことを知っているからこそ、口うるさく、愛する子どもを躰けるのです。特には、厳しく教育するのです。それは、神もそうなのです。一人ひとりが、与えられた人生をそれにふさわしく生きるために、神は一人ひとりを、それぞれに合った仕方で鍛錬されるのです。そして、その鍛錬は、11 節にもあるように、「当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われる」のです。しかし、その鍛錬に耐えたとき、そこには新しい人生が待っているのです。よりすばらしい、充足した人生が待っているのです。そのとき、人は、自分が受けた苦しみを、神の鍛錬として受け止めることができるのです。そして、神に感謝する者となるのです。

ある人は、「人生の最大の試練は、何の試練もないことだ」と語っています。何の試練も、何の苦しみもないことは、よいことだともうかもしれません。しかし、それこそが最大の試練、苦しみであるというのです。なぜなら、人は苦しみをとおして成長し、より豊かな人生を生きることができるようになるからです。ですから、わたしたちには、そうした試練が必要なのです。今日の聖書の言葉で言えば、神の鍛錬が必要なのです。そして、神は、その鍛錬を、わたしたち一人ひとりに、それぞれに合った仕方でお与えになっているのです。そして、それが、聖書が語る世界観なのです。こうした世界観があるということ、今日、特に若い人たちには知って欲しいと思います。そして、そうした神の鍛錬に大胆に挑戦して欲しいと思います。今日の聖書の 7 節には、「あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい」と語られています。そして、12 節以下では、「だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい」「自分の足で歩きなさい」と語られています。人生において遭遇する苦しみのままでは終わらないのです。それは、より豊かな人生へとわたしたちを導く神の鍛錬でもあるのです。今朝は、そのことを、深く心に覚えたいと思います。